

超ハード!?
Summer
キャンプ



成人向
FOR ADULT ONLY

超ハード!?
サマー
SuMmer
キャンプ

超ハード!?
サマー
SuMmer
キャンプ



成人向
FOR ADULT ONLY

成人向
FOR ADULT ONLY



AUG		
Thu	Fri	Sat
2	3	4
9	10	11
16	17	18
23	24	25
30	31	

Tenn

「また真裸でゲームか！この裸族め」

「ん？このほうが調子がいい」

「マジで裸族かよ！」

弟の反論にそうツツコミを入れる久我颯太郎は、自分自身も風呂上りで、タオル片手に全裸のままだ。

「オマエモナー」

それを見た弟の生意気な憎まれ口に、颯太郎は芝居がかった言い方で再び弟を攻撃する。

「なるほど。陽次郎くんは、例の新型ゲーム機は要らないのだね！」

「うえっ！おにいさま、今日も鍛え抜かれてカッコよく引き締まった大胸筋と腹筋がせくしくでチンポもデカイっすねごめんなさい！」

兄に買ってもらった約束のゲーム機を死守するため、ふざけた謝罪を口走る弟に呆れながら、颯太郎は真面目な口調に戻して注意する。

「明日は、ハル達とサマーキャンプだぞ？風邪引く前に着ろよ」

「うん。兄ちゃんは一遅れで参加って、アルバイト？」

「おう。中等部最後のキャンプに三年生が不参加は有り得ないけど、バイトもイロイロあって結局は断れなくてな」

「空手部のサマーキャンプって言っても中身は、ほぼ遊びでしょ」

「箭学園空手部の大事な伝統行事なんだよ。覚えとけ中等部一年生」
「へーい」

「ヨウちゃん、覚悟！」

「ハルっ？、ちよっ、ドッチボールじゃないって！」

そう叫びながら笑う陽次郎に、幼馴染の春翔が投げつけたスイカのビーチボールが直撃すると、空手部男子中学生八人による波打ち際のビーチバレーは、そのままドッチボールっぽい何か、に様変わりして、無慈悲な乱打戦に突入した。

「一番被弾したヤツは罰ゲームな！おちんちんチャレンジ！」

三年生のアキラが言ったその一言で戦いはさらに熾烈を極め、空手部の筋肉男子中学生の腕力にまかせた剛速球（スイカのビーチボール）が平和な海水浴場の波打ち際を飛び交った。

箭学園中等部空手部のサマーキャンプは、毎年夏休みに二泊三日で行われる恒例行事で、基本的には部員同士の懇親を目的としたレクリエーションがメインだが、近年は地元の空手道場との合同練習や夏祭り会場での公開演武、さらにはボランティア活動など箭学園の看板を背負った公式行事的な性格が強くなっていた。

そんな中で初日だけは、早朝からの貸し切りバスによる長時間移動の後は、夕食の時間まで自由行動が許されているのだ。

そして一年生から三年生まで総勢五十人を超える参加者の大半は、宿舍の目の前にある海水浴場に繰り出していて、陽次郎と、その幼馴染の樹春翔の一年生コンビは、普段から仲の良い同級生二人と二年生二人、三年生二人の八人で一緒に遊んでいた。

「ふははははっ！イツキハルトよ！！最後に言い残す事はあるか！」

春翔を追い詰めた陽次郎は、ノリノリでポーズを決めながら言う。

「っふ！さっさとヤリな！」

春翔もニヤリと笑いながら決めポーズ。

「そこは、くっころ、だろうう！」

陽次郎はそうツツコミながら全力で振りかぶった！

「んがあっ！」

陽次郎が至近距離から全力で叩きつけたビーチボールを、春翔は豪快に受けきった！

「ナニイっ！」

素のままで悪役のように驚愕している陽次郎に向け、春翔は間髪を入れずにビーチボールを放った！



「いらつしやいませえ！何名様ですかあ？」

「あ、八名なんですけど、いけます？」

「あゝはい、大丈夫です。どうぞ」

海水浴場から道路一本挟んだ場所のファミレスは、やはり海水浴客で混んでいたが、陽次郎達はタイミングよく空いた席に案内された。

「ラッキーだったな！」

「そうっすね。…まあ、満席のほうがかつたけど」

陽気に幸運を喜ぶ先輩に、陽次郎は落胆を隠さずに愚痴る。

「往生際が悪いぞ、陽次郎！」

三年生のタクヤは笑いながら陽次郎の頭をワシヤワシヤと撫でる。

「そうだぞヨウちゃん！潔く死ね！社会的に」

春翔も情け容赦なく追い打ちをかけ、仲間全員が爆笑する。

「へっ！覚えてろよ！化けて出てやるからな！」

陽次郎は拗ねてそう言い捨てると、メニューを手に取った。

ビーチボール・バトルロイヤル（と事後に三年生が言い出した）の敗者は、最後にまさかの被弾をした陽次郎だった。

その瞬間までは、春翔が被弾数の敗者レースを爆走していたのだが、陽次郎の調子こいた上での無様な被弾は百発被弾に相当する、と三年生のアキラが言い出して、陽次郎以外の全員一致で決定したのだ。

当然、陽次郎は猛抗議をしたが決定が翻ることは無く、罰ゲームとして、最近SNSで話題の『おちんちんチャレンジ！』を実行すると約束させられていた。

そして、そのために、ファミレスでの昼食なのだ。

「さて、食後のアイスも食い終わったことだし、メインディッシュだな」
アキラの言葉にタクヤも頷き、スマホの画面を陽次郎に見せる。

「コレが、筭アーツが勝手に定めた、事実上の公式ルールだぜ」

おちんちんチャレンジの掟！

（1）公共の場、オープンな場所で行う

（2）パンツはお尻が出るまで下げる

（3）乳首とへそも出す

（4）撮影する

「撮影は春翔、お前やれ」

「はいっ！」

通路を挟んだ隣の席に座る春翔が、楽しそうにスマホを取り出す。

「おらっ陽次郎、お前の兄貴に負けないアイドル顔と、セクシーなナイスバディ、デカイけど包茎なチンポを全世界に晒して見てもらえ」

アキラの『先輩命令』に陽次郎はふっと頬を膨らませて露骨に不満顔をするが、春翔がスマホを向けると、カメラ目線で照れ笑いを浮かべて、一応は小声で、お約束の自己紹介を始めた。

「おつす！筭学園中等部空手部一年、久我陽次郎です、先輩に命令されて『おちんちんチャレンジ』しまっす」

言い終わると同時に、陽次郎は座ったままで、躊躇うことなく下着ごとハーフパンツを足元まで下ろしてチンポを晒す。

包茎ながら長さと太さのあるペニスと、ボリウム感のある睾丸だ。そして、パーカーを両手で捲り上げて、綺麗に六つに割れた腹筋とへそ、形の良い大胸筋とピンク色の乳首を出すと、カメラ目線で小さく舌を出しておどけて見せた。

「さっすがヨウちゃん！」

直前までの抵抗にもかかわらず、あっさりと、ノリノリでチンポを出した陽次郎に春翔は感嘆しながらシャッターを切りまくる。

しかし、春翔の反応が大き過ぎて、周囲の客にも気付かれてしまう。それに気付いた陽次郎が慌ててチンポを隠そうとすると、アキラの陽気な、しかし絶対に反論を許さない時の口調で、命令が下った。

「先輩命令だ！そのまま出しとけ！」



「ちくしょ、なんかバズってるじゃん」

陽次郎は、海水浴場の入り口でスマホを見ながら口を尖らせる。

八人がファミレスを出た後は、各自の行きたい場所が違っていたので解散し、陽次郎と春翔は一緒に海水浴場に戻っていた。

結局、ファミレスでは周囲にいた他の大勢の客にも露出がバレてスマホで撮影されまくり、『おちんちんチャレンジ』としては失敗したのだが、その事自体もネタにしたツイートが順調に伸びていた。

「…ああ！なんだ、結局、先輩達の思う壺かよ！」

伸びているツイートで、ちゃっかり明日行う空手部の公開演武の宣伝をしていて、この用意周到さは絶対に最初から狙っていたものだ。

「まっ、いいけどさ。ちんちん見られるくらい」

陽次郎は苦笑しながらスマホを閉じて周囲を見回す。

「…ハルのヤツ、どこまでトイレ探しに行っただんだ？」

気が付けば、春翔がトイレを探しに行ってから三十分も経っていた。

「よう！久我クンだよな？」

キョロキョロと見回して春翔を探している陽次郎に、突然、ビキニタイプの水着を着た、見知らぬ若い男が声をかけてきた。

中学生か高校生か、兄の颯太郎と同じくらいの体格で、釣り目がちで目つきの鋭い芸能人のようなイケメンが、人好きのする笑顔を陽次郎に向けている。

「えっ？…そうだけど…」

驚いた陽次郎が警戒感を隠さず躊躇いがちに答えると、若い男は水着姿の陽次郎の全身を嘗め回すように見て満足そうに頷いた。

「いいね！期待以上だ！ガチでアイドル顔負けの美少年だし、体も中学生にしてはかなり出来てる、最高のエロボディだ」

「…あんた誰だよ」

初対面の人間にそこまで言われて面食らった陽次郎は、小声でそう

吐き出すのが精一杯だったが、そういう目の前の若いイケメンも、兄の颯太郎にも負けないくらい鍛え抜かれた肉体で、派手な柄のビキニに収まっているチンポもデカかった。

ついビキニの股間を見つめてしまった陽次郎の視線に気づいた若い男は、苦笑気味に笑って自己紹介する。

「俺は加賀だ。よろしくな！このビキニは、さっきまで別の撮影でさ」

加賀という若い男は、陽次郎の疑問には何も答えずにそう言うと、足元のバッグからタブレットを取り出して陽次郎に画面を見せてきた。

「…えっ！」

戸惑いながらも画面を見た陽次郎は、驚愕のあまり絶句する。

「ああ、俺のは別だ。コレは部下に任せたやつ。良く撮れてるだろ？」

陽次郎が絶句したのは、もちろんソコでは無い。

画面では、泣きわめく春翔が、全裸に剥かれて複数の大人に押さえつけられ、ガラスの浣腸器で大量の液体をアナルから注入されていた。

「ハルトオっ？」

「オトモダチの春翔クンは、一足先に地獄に落ちてるぜ！お前もすぐに落ちてもらうぞ！」

「えええっ！」

「おっと、いまさら『止めた』は無しだぜ？俺らも『組』の命運を賭けているからな！もしお前が逃げたら、オトモダチのチンポをちゃん切って売り飛ばすしか無くなるぜ？」

「ちよん切ってって、そんなっ」

「安心しろ、言う通りにしていれば、二人とも五体満足で後遺症もなく元気に生かして帰す。それは俺の命にかけて約束する」

「…いのちって」

「まあ、オトコに生まれてきた事を激しく後悔するくらいには痛くて辛い思いをしてもらうけどな。発狂だけはしないでがんばってくれ」

「…へっ？」



「おっ！似合ってるじゃねえか！ぎやはははっ！」

加賀の陽気な笑い声が、真夏の日差しに輝く豪華な庭に響き渡る。海水浴場から車で五分の場所にある、以前は大企業の保養施設だったという洋館の、海に面した庭にあるウッドデッキに、陽次郎と春翔が引き出されてきたのだ。

二人とも、股間の前後に丸く穴が開いてチンポが丸出しになっているスパッツタイプの競泳水着を着せられ、さらに大用の首輪とリードを首に着けられていて、そのリードを若い強面の男に引かれている。

「言つとくが、この水着は特注品だぜ？ハサミで穴を開けただけじゃなくて、ちゃんとチンポとアナルを丸出しでも型崩れしないように縫製してあるんだぞ？」

加賀はそう言つてニヤリと笑いながら、陽次郎と春翔のチンポを右手と左手で同時に握った。

「んっ…」

「ひいっ」

陽次郎は軽く息を飲み、春翔は小さく悲鳴を上げるが、加賀は二人のチンポを握ったまま話を続けた。

「二人とも、生まれて初めての強制浣腸はどうだった？」

加賀の言葉に、陽次郎と春翔は赤面して顔を歪める。

春翔のチンポをちよん切ると脅迫されて連れてこられたこの洋館の中で、陽次郎も春翔と同じように強制浣腸を喰らって、当然のように一部始終を撮影されてしまっていた。

どう見ても中高生の加賀の『部下』たちは、なぜか全員が顔が怖すぎる屈強な成人男性で、しかも加賀のことを『若』と呼んで絶対服従しており、さらに加賀自身の『おれらの組』発言から考えられる結論から、：陽次郎と春翔は、彼らに逆らう事はできなかったのだ。

「おかげで最高に最低な映像が撮れた。高く売れるぜアレは」

そう言いながら、加賀は二人のチンポを優しく揉む。

「：うん、二人とも良いチンポだ。今日これから、コイツを徹底的に痛めつけてオトコに生まれて来たことを後悔させてやる。それからザーメンを一滴残らず搾り取って、さらに、お前達のアナルを最高級の『チンポケース』に墮とす。：覚悟しろ、とは言わねえ。諦めて地獄に落ちてくれ」

真っ青になって言葉が出ない陽次郎と春翔に、加賀は追い討ちをかけるように言葉を続ける。

「お前達を淫乱M奴隷に墮とすSM調教の一部始終を、お客さんに生で見てもらって、さらに4Kで撮影した映像を会員に売りさばく」

「：っあ！それであんな書類を書かせたんだ：」

何かに気付いた陽次郎に、加賀は極上の笑顔で頷く。

「ああ、そういうことだ！：もうすぐお客さんが到着する。お前達は、自ら望んで奴隷調教されるドM中学生という『設定』なのさ」

「設定！」

愕然とする春翔の目を覗き込みながら、加賀はニヤリと笑う。

「もちろん、お客も実際には解ってるけどな。だが、そこはお互いに言いっこなしだ。だから、お前たちも『設定』は守ってもらうぞ！万が一にも、この見世物をぶち壊したら、責任はガッツリ取ってもらう」

そう言いながら、加賀は掌の中の二人の睾丸をコリコリ転がした。

「んぎゃあ！」

陽次郎と春翔は声をそろえて悶絶する。

「よし、そろそろ、お客さんをお出迎えする準備を始めるぞ！」

加賀の指示で強面の男たちが慌しく動き出し、加賀は陽次郎の左の乳首をつまみ上げると、いきなり名札の安全ピンを突き刺した。

「っ痛たあっ」

さらに、陽次郎のペニスを握って皮を剥き、むき出しになった尿道口に手際よく、短く安全に加工したボールペンの芯を挿し入れていく。



SMキャンプ
参加申込書
処刑方法無制限のSM調教を
自ら希望して受けます
智学園中等部空手部
1年 久我陽次郎

久我陽次郎

TEN

「ぎゃああつ！」

たまらず絶叫する陽次郎に、加賀は笑いながら肩をすくめる。

「大げさだな、チンポペンはそんなに痛くは無いはずだぜ？」

器用に陽次郎の尿道口からボールペンのペン先を出して、陽次郎のペニスを『チンポペン』にすると、加賀は問答無用で春翔にも同じように『名札』と『チンポペン』を装着していく。

「ひぎいっ！」

今度は、春翔の悲鳴が真夏の日差しに満ちた庭に響く。

「いらつしやいませ！超ハード！サマーキャンプへようこそ！」

大型バスから降りてくる客を、さらに薄手で布面積の小さい、ほぼチンポの形が丸出しのビキニに着替えた加賀が、極上の営業スマイルで迎えて、海に面した庭に誘導していく。

「まずはこのまま海側の庭へおまわりください」

そして、庭に回った客達を、チンポ丸出しで『裸名札』を付けた陽次郎と春翔が出迎えるという趣向だ。

「本日、皆さんにSM調教を生で御覧いただく『肉奴隷志願者』をご紹介します。箭学園中等部空手部一年生の久我陽次郎と、樹春翔っす」
エロビキニ姿の加賀に紹介された二人は、事前に命令されたとおりにお客にむけて恭しく頭を下げた。

チンポと尻が丸出しの競泳水着を着て、乳首に直接名札を下げ、首輪とリードで柱や手すりに繋がれた筋肉男子中学生に、大型バス一台分の観客から静かに歓声が沸きあがる。

そして、スタッフ（のヤ○ザ）が二人に一枚づつ紙を手渡し、それを陽次郎と春翔は赤面して半泣きになりながら自ら掲げて見せると、観客からは更に歓声と笑い声が沸き起こった。

SMキャンプ参加申込書と書かれたその紙には『処刑方法無制限の

SM調教を自ら希望して受けます』という文言と、直筆の署名、そして印鑑代わりに『チン拓』が押されていた。

「では皆さん、お手数ですがこちらの誓約書にご署名をお願いします。ペンは、こちらのチンポペンをお使いください」

陽次郎と春翔は、二十人以上の見知らぬ観客にチンポを『使われ』て、その全員にチンポだけではなく全身を撫で回されていく。

「つあ、オレのチンポを使っていたき、ありがとうございます！」

そして、その全員に大きな声でお礼を言うのだ。

「おまたせしました！それでは超ハード！サマーキャンプ、開始します！まずは陽次郎と春翔の二人に、もう自分達に『人権』は無い事と、どんな拷問・調教にも拒否権が無い事を思い知らせます！」

加賀の合図で、ガレージから陽次郎と春翔が乗せられた『三角木馬神輿』が担ぎ出されてくる。

全裸に首輪だけの姿で後ろ手に縛られた二人は、それぞれ、木造の三角柱を横にして、背に鋭角の金属板が貼られた『三角木馬』に神輿の担ぎ棒を装着したモノに乗せられてるのだ。

それを体格の良い、黒の三角頭巾を被ったビキニ姿の筋肉男達が担いで観客のすぐ目の前にやってくる。

近くで見ると、陽次郎と春翔は両足を足輪と鎖で木馬に繋がれていて、さらにアナル入れたローターで強制勃起させられたペニスは、春翔は包茎のまま皮の先から、陽次郎は剥けて丸出しになったピンクの亀頭の先から、それぞれ透明な粘液を零していた。

「処刑開始！」

加賀の指令を受け、三角頭巾達は勇ましい掛け声とともに一斉に神輿を激しく上下に揺さぶり始め、そのまま事実上のプライベートビーチに繰り出していく。

「ぐああつ！」



股間を鋭角な金属板で激しく突き上げられる度に、陽次郎と春翔は激痛に絶叫し、強制勃起させられたペニスを無様に振り回しながら透明な粘液を撒き散らす。

そうして快晴の青空の下、神輿は真夏の日差しに輝く砂浜を練り歩き、さらには海の中にも入って、二人の痴態を晒すこと三十分。

陽次郎と春翔は、最後はアナルに入れたローターから遠隔操作で同時に苛烈な電撃を打ち込まれ、絶叫しながら派手に射精して気絶した。

「皆さん、『男子中学生の丸出し三角木馬神輿』と『海水浴』をお楽しみいただけましたか？小さいながらも事実上のプライベートビーチですから、皆さんも丸出しでOKだったんですよ？」

引き続きエロビキニ姿で司会進行する加賀の軽口に、普通の水着姿の観客達からは和やかな笑いが沸く。

陽次郎と春翔の公開処刑の後、二人のケアと次の調教の準備を行っている間、観客は普通に海水浴を楽しんでいたのだ。

そして、そのまま洋館の中にある宴会場に案内されて、宴会場の心に組まれた五メートル四方ほどの演武台を囲んでいた。

演武台の中心に立つ加賀は、エロビキニを少し地味な色に着替えていて、ポケットの多いパーカーを着て、紙袋を足元に置いていた。

「それでは、次の調教を開始します！」

加賀の合図を受けて、全裸に首輪だけという姿の陽次郎と春翔が演武台に上げられ、加賀の左右の隣に立って観客に頭を下げた。

二人は気丈に胸を張って前を向いているが、羞恥と屈辱に頬を染めていて、股間のペニスは緊張で完全に縮んでいる。

「ご紹介した通り、この二人は現役の空手部員です。しかも、実際には幼稚園からのキャリアがある実力者です。せっかくなので、その実力を皆さんにも披露させることにします！」

そう言った直後、加賀は陽次郎と春翔の尻をパアン！と強く叩いた。

「おらっ、仕込むところからお客さんに見ていただくぞ！尻の穴をカメラ向けて差し出せ！」

陽次郎と春翔は命令された通りに、スタッフがしゃがんで構える4Kカメラに向かって尻を突き出して自ら広げると、会場の壁にある大型スクリーンに二人のアナルが分割画面でそれぞれ大写しになった。

パクパクと呼吸に合わせて息づくアナルに観客が沸きあがり、陽次郎と春翔は首まで真っ赤に染まる。

「へへっ！綺麗なアナルじゃねえか！コイツがお似合いだな！」

加賀は自分のパーカーのポケットから、エグイイボイボがびっしり生えたデイルドを二つ取り出して、観客に掲げて見せる。

「っんあああ！」

そして、いきなり二人のアナルに突き入れてグリグリと抉ると、陽次郎と春翔の包茎ペニスがポンっ！と跳ねるように勃起する。

さらにその後、丸い取っ手だけがアナルから出る所まで押し込んだ。

「よし、次はこっちだ」

加賀は、アナルのデイルドに悶絶している二人に命じて、それぞれ大きく足を開いてガニ股にさせると、淫囊の根元をレザーのバンドで締め上げて睾丸を縊り出し、バンドに紐で未開封の五百ミリペットボトルをぶら下げてしまう。

「っんん！」

陽次郎と春翔は、苦痛と恐怖と羞恥に赤面しながら顔を歪めるが、黙って金玉を差し出し続けるしかなかった。

「おりやつ！おりやつ！」

加賀が突然、二人のペットボトルを連続して蹴り飛ばす！

「っぎゃあああっ！」

ボンっ！という音と同時に吹っ飛んだペットボトルに引かれて淫囊の根元のリングが激しく二人の睾丸を縊り出す！

「OKだ。このまま演武しろ！金玉拷問演武、開演だ！」



「ったああ！」

陽次郎は気合と同時に、鋭い動作で高く足を蹴り上げる！

一呼吸遅れて、陽次郎の淫囊の根元からぶら下げられた未開封のペ
ットボトルが、大きく揺れ動いて陽次郎の睾丸を激しく縊り出す！

「んっぎゃあ！」

ほぼ同時に、春翔の金玉もペットボトルに縊り出されて変形する。

「んぎいいっ！」

陽次郎と春翔はあらかじめ、股間の動きが激しい型の演武だけをす
るように命令されていて、ひたすら自分の金玉を痛めつける演武を、
しかも観客が良く見えるようにチンポを突き出すように演じていた。

さらに、アナルの中のデイルドは遠隔操作で激しく回転と振動を繰
り返し、勃起したペニスからは透明な粘液を撒き散らし続けている。

陽次郎は最初こそ虚勢を張っていたが、春翔はすぐに泣き喚いて涙
と涎を撒き散らしながら演武をし、陽次郎も間もなく余裕を失って、
泣いて奇声を発しながら演武を続けた。

「ひいあああああつ！」

「ヘンタイ空手中学生の金玉拷問演武、思った以上にお楽しみいただ
けているようですので、時間を延長します！」

予想以上に観客に受けた金玉拷問演武は、予定の倍の時間を行って
終了した後、消耗しきった陽次郎と春翔はスタッフに抱えられて宴会
場の隣の小さな部屋に連れ込まれ、椅子の座面に切れ込みがある医療
用の椅子型診察台のような椅子に座らされた。

そしてM字に足を開いた状態でレザーのベルトで両足を固定され、
両手は後ろ手に椅子に縛り付けられ、アナルを晒しチンポを突き出す
形で椅子に拘束されてしまう。

「悪いな、演武を延長しちまって時間が押してるから休憩は無しだ。
このまま、お客さんの玩具になってもらうぜ！」

陽次郎達の前に現れた加賀は、意外にも本気で申し訳なさそうな様
子だったが、言っていることは鬼か悪魔だった。

「そろそろ、筋肉男子中学生の肉体で遊んでみましょうか！」

すぐに陽次郎達のいる部屋に観客が案内されてきて、約六十人の観
客はそれぞれ好みの少年の前に集まった。

「ちようど半々つすね！良かった。実は、都合で急遽調達したチンポ
達なんでタイプ調整ができなくて、つて、おっといけねえ！」

加賀のぶっちゃけ発言に、観客からはドツと笑いが沸く。

「ああ、あと、あちこちにあるカメラもご心配なく。皆さんの姿は絶
対に映像に残しません。このチンポ達の痴態は売りさばくけど。じゃ
あエロチンポ共！お客さん達にお願いする事があるだろ！まずは陽次
郎からだ、言え！」

加賀の突然のフリに慌てた陽次郎は、むしろ躊躇することなく命令
されたセリフを口走る。

「お、オレのチンポとアナルで遊んでください！特注の尿道ドリルで
チンポの穴をほじって、電撃アナルパールをアナルから腹の中にぶち
込んで、腹いっぱいにしてください！お願いします！」

春翔も続いて同じセリフを涙目で叫ぶと、加賀は歯医者で使うドリ
ルのような器具に白くて柔らかな素材の細長いドリルを装着する。

「まずは俺が実演しますね」

加賀はそう言うと、陽次郎のアナルに指とアナルパールを突っ込ん
で一撃で陽次郎のペニスを勃起させて左手で握り、むき出しになった
亀頭の尿道口にドリルを宛がう。

「いくぜ！」

キーンという歯医者と同じ音がしてドリルが高速回転を始め、それ
を一気に陽次郎の尿道に突っ込んだ！

「ぎゃああああああつ！」



まるで尿道の掃除でもするかのように、高速回転するドリルを陽次郎の尿道の中でゆっくり上下させていく。

「コツは、ペニスを強く握らないことつす。やさしく添える感じで。それで、尿道の形をなぞるようなイメージで出し入れしてください」

「ああああっ！んんああああああっ！ひいひいひいああああああっ」

加賀がドリルを出し入れする動きに合わせて、陽次郎の悲鳴が変化しながら途切れることなく続く。

「ちなみに、目一杯奥まで突っ込んで大丈夫ですから」

そう言って加賀はドリルを根元まで突っ込み、最大出力の甲高い音と陽次郎の絶叫が、広くは無い部屋に響き渡る。

「あと、アナルパールも目一杯ぶち込んで、腹の中で電撃喰らわせてやってください。スイッチは足元のペダルです」

「っん、があっ！」

加賀ペダルをドンッと踏むと、陽次郎はビクンっ！と全身を痙攣させて悶絶する。

「じゃあ、お一人様二分くらいでどうぞ！」

それから一時間以上、陽次郎と春翔は尿道とアナルを観客に弄ばれ続け、そのため悲鳴を上げすぎて声が枯れる寸前までいった。

「次は、筋肉男子中学生の肉体で遊ぼう第二弾！銃殺刑ごっこです。」
僅か三十分の休憩のあと、陽次郎と春翔は両手を纏めて鎖で吊り下げられ、さらに両足首を股間を大きく開く形で吊り上げられていた。

そして、目には大きめのセーフティグラスを装着されている。

「ルールは簡単です。お一人様一千発のBB弾を、二人の肉体の好きな部位に打ち込むだけです。こうやってね！」

加賀の持つモデルガンの銃口が、春翔の金玉に至近距離で向けられると、そのまま引き金がかれてBB弾が連射で打ち込まれる

「うあああああっ！」

「おっと！コイツを忘れてた！」

ワザとらしく加賀が取り出したのはエグい突起がびっしり生えたバイブで、それを陽次郎と春翔のアナルに無造作に挿入していく。

「んんあああ！」

絶妙な角度で前立腺を抉られた二人のペニスはボンと勃起してふらふらと無様に揺れて、さらにペニスが除かれたことによって、金玉が無防備に丸出しになって観客達の銃口に晒される。

「ちなみに、アナルから出ているバイブの頭に上手く弾が当たると、スイッチが入って電撃と振動が発生します。景品は出ません」

加賀の軽口の間に、観客達にモデルガンが配布されていく。

「では、筋肉男子中学生の銃殺刑を開始します！エロチンポの二人は、マジで殺されるつもりになって、恥かしい秘密を白状しろ！つまらなかつたら、チンポをちよん切るぜ！まずは樹春翔！いけっ！」

加賀の命令に一瞬躊躇った樹は、ヤケクソ気味に叫ぶ。

「オレっ、ヨウちゃんとセックスしたかった！初めてはヨウちゃんと決めていたのに、こんな事になって悔しい！ちくしよおっ！」

「よしっ！合格！撃てええ！」

加賀の激で、春翔の肉体に、特に金玉にBB弾が打ち込まれていく。

「ぎゃああああっ！」

「次っ！久我陽次郎！」

「オレだっ！初めてはハルとのつもりだった！今回のキャンプで犯すつもりだったのに！あとアナルの始めてはタクヤ先輩に予約されたのに！ゴメン！タクヤ先輩！オレもう！ちくしよおお！」

「はい！合格！撃てええ！」

さらに苛烈なBB弾の嵐が陽次郎の肉体を、特に金玉を襲う

「ぐああああああっ！」



「今度はシンプルに、筋肉男子中学生のロストバージンショーです」
「…っ」

一転して艶かしい声音で語る加賀と、二人だけで演武台上がった陽次郎は、今日これまでで一番の羞恥心に襲われていた。

加賀は完全な全裸で、陽次郎も首輪だけ装着した全裸だ。そんな二人が奇妙な道具も過激な衣装も無く、ただ普通に並んで立っているのは演武台の角の部分で、観客との距離も一メートル程度。

しかも、スポットライトで照らされた二人だけが光の中で全裸で、周囲の観客は暗闇の中から白く光る目だけが見えるのだ。

先程までのように『玩具』としてでも、『マゾチンポ奴隷』としてでもなく、ただの男子中学生の久我陽次郎として、見知らぬ大勢の男達の前に全裸で立っている、そう思い知らされて羞恥心が暴発していた。
「なんだ、いまさら恥かしいのか？」

やさしく、艶かしい声で加賀は陽次郎の耳元で言う。

大きくは無いが、観客にもはっきり聞こえる声で。

そして、背後からやさしく陽次郎を抱きしめる。

「っあ！」

加賀の逞しい肉体を、形の良い大胸筋や綺麗に六つに割れた腹筋、そして熱くて太い完全勃起したズル剥けペニスを裸の背中に直に感じて、陽次郎は思わず熱い声を漏らす。

「おまえは、これから、ここで、俺とセックスするんだ。生まれて初めてのアナルセックスをする」

改めてはつきりと宣告されて、陽次郎は胸がいっぱいになって頬をさらに赤くして絶句してしまう。

「覚えておけ。おまえの初めてのオトコは俺、加賀丈太郎だ」

陽次郎は、自然とコクンと頷いてしまう。

「貴重な体験だぞ。おまえの初めてのアナルセックスは六十人の人達に直接、直ぐそばで、一部始終を見てもらうんだ」

「あっ！」

加賀の言葉で、改めて自分の置かれた状況を思い出す。

「：お前が流す涙も、漏らす嬌声も、垂らす涎も、そして射精するザーメンの匂いまで、全部見て感じてもらう」

「…っ！」

陽次郎の包茎ペニスが勃起して、剥けたピンクの亀頭が露になる。

「ふっ、いいじゃないか。さらに言うと、全部4Kで録画して配信やディスクで売りさばく。自分で言うのもなんだけど、少年A Vでは加賀丈太郎は売れっ子なんだ。最低でも五桁、たぶん六桁は売れる。その全員にお前の肉体と始めてのセックスを見てもらうんだぜ？」

「あああっ」

そう言いながら、加賀は陽次郎の左の乳首を摘んで揉み、右手で勃起したズル剥けペニスを掴んで扱く。

トンデモ無い事を言われているのに、陽次郎のカラダは熱くなり、気持ちちは歓喜に満ち溢れていく。

さらに目の前の六十人の視線が全身に突き刺さってチンポに流入していくような錯覚に喘いでしまう。

「：マジで、おまえは最高だ。お前のカラダ、チンポにアナルにセックスも、全部、全人類に見せたいぜ」

「そんなんっ」

そう言われて喜んでいる自分に陽次郎は驚愕する。

自分の知らない自分に軽いパニック状態の陽次郎を、加賀は言葉でどんどん煽りながら、同時に両手でその完璧に近い肉体を愛撫する。

「…っああ！あれ？」

自分自身はまったく意識していないタイミングで、急激に射精欲が沸き起こり、陽次郎は本気で戸惑う。

「いいぜ、一回出せ。俺もお前の射精が見たい」

「っ！あああっ！」



加賀の言葉に刺激され、陽次郎は暴発するように射精した。
陽次郎の人生で最大量の精液が綺麗な孤を描いて飛んでいく。

「たまんねえな、マジで良いよおまえ」

加賀はギュッと陽次郎を抱きしめる。

「あっ！」

そして、再び耳元で囁くように言う。

「アナルを使うぜ。嘗めてやるから四つん這いでアナルを差し出せ」

「っそんなあ」

口ではそう言いながらも、陽次郎は素直に言われたとおりに四つん這いになってアナルを差し出す。

「っあああ！」

加賀の両手が陽次郎の尻肉を左右に開いてピンクのアナルを曝け出し、そのアナルを加賀の舌が愛おしげに嘗める様子が壁の大型スクリーンに映し出される。

クチュクチュと卑猥な音と、陽次郎の艶かしい喘ぎ声だけがスポットライトの中で響いている。

「そろそろ、俺のチンポでお前のアナルを犯す。お前自身に『欲しい』って言って欲しいな」

加賀の言葉に陽次郎は躊躇わずに頷く。

「オレ、加賀サンのチンポが欲しいです！オレの尻に加賀サンのぶつとチンポ入れて欲しい！オレのアナルバージンを貰ってください！」

加賀は満足げに頷くと、自らの完全勃起したズル剥けペニスの亀頭を陽次郎のアナルに押し当てる

「っあああ！」

陽次郎は加賀の亀頭の熱さに悶絶しながらも、必死でアナルを開こうと、加賀のペニスを受け入れようと足掻く。

「ホント、たまんねえな」

加賀はオトコの顔で喉を鳴らすと、陽次郎の腰を両手で掴む。
「いくぜ！」

加賀のペニスが陽次郎のアナルに一息で挿入される。

「あああああああっ！」

陽次郎の悲鳴と嬌声が混じった声が響き渡り、陽次郎のペニスからはザーメンが小便のように噴き出した。

「ヨウちゃん！」

「ふふからはもってろ」

陽次郎は春翔の包茎ペニスを咥えたまま何かを言う。

『いいから黙ってる』だと理解はできるが、突然チンポを咥えられた春翔はただ戸惑うばかりだ。

加賀と陽次郎の濃密でエロいセックスを見せ付けられて、密かにへこんでいた春翔だったが、セックスを終えた二人が何か小声で話したかと思うと、次の瞬間にはチンポを咥えられていたのだ。

「あっ、ヨウちゃん、そんな！」

陽次郎は春翔の包茎を口の中で剥きあげて、亀頭を直接嘗めている。
「いいから、そのままやらせろ」

加賀が二人に近づいてきて、春翔に耳打ちする。

「陽次郎に俺が言ったんだ。このまま春翔を犯してアナルバージンを奪え、ってな。俺が奪うよりはいいだろ？」

「ヨウちゃん…、あっ、出るっ」

そう言うのと同時に、陽次郎の口の中で春翔は射精をする。

「よし、そのザーメンを使ってアナルを解せ」

渋い顔で口を閉じたままの陽次郎は、春翔を乱暴に転がすとアナルにかぶりつくように口を当てる。

「うひゃあ」



「んんんっあん」

陽次郎の二本の指は、クチュクチュと卑猥な音を出しながらも、ぎこちない仕種で春翔のアナルを解していく。

先程までの加賀と陽次郎のセックスに比べると、色気より初々しさが全面に出てしまっているが、それはそれで悪くないようだ。

「ヨウちゃん、もういいよ。ぶち込んでよ」

「でも、ハル、もし怪我したら…」

「大丈夫！確かにヨウちゃんのチンポはデカイけど、ソウちゃんに比べたらマダマダだしね！やろうぜ！」

陽次郎は兄と比べられてカチンときたが、それが気を使った春翔の作戦だということも長い付き合いですぐ判った。

確かに、そろそろ入れないと場が持たないのだ。

「わかった！イツキハルト！オレのチンポで突き殺すから覚悟しろ！」

「おうっ！やれるもんならやってみな！来いっ！」

陽次郎はゆっくりと自分の剥けた亀頭を春翔のアナルに沈めていく。

「んああああっ！」

「ハルっ！」

「大丈夫っ！そのまあぶち込め！」

「っん！」

狭くて締まった春翔のアナルに、ゆっくりと、しかし確実に、陽次郎のペニスが入っていく。

「はああっ、ああっ！」

「っんあ！入った！」

「はほ根元まで、陽次郎のペニスが春翔の小さい尻に入った。

「んあああ、すげー、ケツから腹にかけて、熱くてぶっとい棒が入っ

てどくんどくんしてる！」

「ハルっ、痛いかな？苦しい？」

「んん。痛くて苦しいけど、嫌じゃない。ヨウちゃんのチンポだと思

うと、スゲー嬉しいし、あったかい。オレの中にハルちゃんが入ってるとか、なんか凄いじゃん！」

「そっか」

アナルセックスの感想としてはどうにも色気が無いが、春翔らしくて陽次郎は嬉しかった。

「：動いてみていいかな？」

陽次郎の遠慮がちの言葉に、春翔は威勢よく応える。

「おうっ！やってくれ！オレの事、肉オナホにしてくれていいぜ！」

陽次郎は苦笑しながら、ゆっくりとペニスを出し入れし始める。

「うおおおっ！」

「やっぱ、春翔のアナル、狭くて凄いつ！これは、もたないっ」

わずか数回の出し入れで、陽次郎は限界を迎えてしまう。

「あああっ、出すぞハルっ！」

「おうっ！」

春翔の直腸の奥で、陽次郎は射精をする。

「あああっ！熱いのが腹に当たるう！」

「さて、綺麗なセックスショーはお仕舞い。過酷で残酷、そしてゲスい、三拍子そろった、残忍なSM調教を再開するよう」

本気で楽しそうな加賀の宣言に、観客も沸く。

陽次郎と春翔はもうすでに諦めの境地に至っていたが、加賀の合図で演武台上がってきた男達を見て、再び恐怖に顔を強張らせる。

三角木馬神輿を担いでいた黒の三角頭巾を被った筋肉男達八人が、

三角頭巾以外は全裸で、体格的に加賀よりもはるかに巨根なペニスを完全勃起させて整列したのだ。

さすがに観客達もざわめき、その様子を見て加賀は得意げに笑う。

「俺の部下達で、頭と要領は悪いけど、根性と人情、そして精力だけ

はピカイチの連中です。三角マンと呼んでやってください」

加賀の紹介を受けて、三角マンたちは深めに頭を下げる。

「三角マン一号から八号！お前達の任務は、このエロチンポ中学生の二人をチンポとザーメン無しでは生きていけない立派な淫乱肉奴隷に墮落させることだ！犯して犯して犯しまくれ！」

加賀の『指令』に、三角マンたちは、奇声こそ発しないものの、某戦隊の下っ端悪役達のように一糸乱れぬ敬礼で応えた。

「よしっ！お客さんに最高のレイプ・輪姦ショーをお見せするぞ」

そう言っただけで不敵に笑った加賀は、履いていたエロビキニを脱いで投げ捨てる。

「俺も参戦するぜ！体格的にチンポのデカさじゃ敵わないが、テクはお前らには絶対負けねえ！この二人を調教しつつ、お前ら三角マンも俺のチンポとアナルを使って鍛えてやるから覚悟しろ！」

加賀の宣言に、三角マンたちは本気の直立不動で敬礼する。

「おい、お前ら、ちょっと来い！」

三角マン達の輪姦の前に、三角マンの肉体、特に巨根と言って差し支えないペニスを観客に見てもらおうという理由で、三角マンのマッスルショーが始まり、その隙に、加賀は陽次郎と春翔を呼び出した。

「お前ら、このクスリを飲め」

加賀はそう言っただけで錠剤を二人に手渡す。

「これは？」

あからさまに怪しいクスリに、陽次郎達はドン引きになる。

「催淫剤の一種だ。ようは性感帯が以上に敏感になって、超ド淫乱のセックスジャンキーになれるクスリだ」

「ダメなヤツじゃん！」

春翔の突っ込みに、加賀は苦笑する。

「大丈夫だ。健康に害はないし、常習性も無い安全なクスリだ。コレ

を使わないと、お前ら、三角マンの馬鹿みたいな巨根で串刺しにされて泣き喚くだけだぞ？演劇的に、最後は『チンポとザーメン大好き！』ってアへ顔ピースしてもらわなきゃならないんだからな！」

真顔で酷い事を言う加賀に、陽次郎と春翔は哑然とする。

「…わかったよ。毒を喰らわば皿までだ」

陽次郎は軽いため息をついて、白い錠剤を噛み砕いて呑む。

「ヨウちゃんがそうするなら…」

春翔もそう言っただけで錠剤を飲み下す。

「効果は三十分で出てくる。とにかく、オトコのチンポを味わうつもりでチンポとザーメンに意識を集中しろ」

「皆さん！レイプ・輪姦ショーはいかがでしたか？」

自分もつい先程まで三角マンの巨根をアナルに入れていた加賀は、涼しい顔で観客に呼びかける。

「なんとか、無事に仕上がったようです。陽次郎と春翔、皆さんに調教の成果をご報告しろ！」

三角マンに背後からM字開脚で抱えられた陽次郎と、同じように三角マンに抱えられた春翔が並んで観客の前に進み出る。

二人とも、アナルには三角マンの巨根が挿入されたままだ。

「くがようじろうです！おれ、チンポとザーメンが無いと生きていけないです！ずっとアナルにチンポ入れていたいです！」

「いつきはるとです！おれも、チンポとザーメンが無いとしんじやいます！ちんちんバンザイ！」

春翔の『バンザイ』に合わせて、陽次郎と春翔は、レイプ目のまま、完璧なアへ顔ピースを決めた。同時に嘔き出すような射精も晒した。

「よし、ほぼ完璧だ！」

加賀は満足そうに頷く。

「…ただのビタミン剤だったんだけどな」





「皆さんも、どうぞ演武台上がってください」

自分も全裸で汗と精液に塗れ、さらにまだ完全勃起したままの加賀の呼びかけに、赤裸々な欲望の熱気に溢れた観客達が跳ねるように演武台上がり、演武台の中心に横たわる陽次郎と春翔を取り囲んだ。

「ご覧いただいたとおり、このエロチンポ達はチンポとザーメン無しでは生きていけない立派な淫乱肉奴隷に堕ちました！最後に、皆さんのザーメンで溺れさせてやりましょう！」

そう宣言すると、加賀は自分のペニスを抜いて、足元に横たわる春翔の顔面に向けて射精する。

加賀の射精を合図に、観客たちも一斉に水着を下し、既に限界に達しているペニスを出して陽次郎と春翔にザーメンを浴びせ始めた。

「みなさん、順番に譲り合ってくださいねー！」

前のめりになる観客を巧みに制しながら、加賀自身も誤爆やあるいは意図的な射精を受けて精液塗れになっていくが、陽次郎と春翔は文字通り大量の精液に『覆われて』いく。

消耗しきってほとんど意識を手放していた陽次郎と春翔も、本気で呼吸ができなくなるのではないかと、慌てて深呼吸をするほどに。

「お疲れさん！おかげで大成功だ！」

ミルクタンクが空っぽになるまで射精し尽くした観客達は、十分に満足して温泉施設に誘導されていき、陽次郎と春翔、そして加賀の三人だけがザーメンの海の中に全裸で浮かんでいた。

「ほんと、マジで今回は助かったよ。予定していた二人が急に食中毒で入院しちゃった時は、さすがに青くなったぜ」

しみじみと語る加賀に陽次郎はようやく合点がいったが、どうしても妙な違和感が残り、釈然としない。

何かがおかしい。

そう思う陽次郎に、やはり怪訝な顔をしている春翔の顔が見えた。

「若っ！」

そこにスタッフが、ものすごい形相で飛び込んできて、陽次郎と春翔をまじまじと見てから、加賀に何かを耳打ちする。

「……なんだとおオ！またかつ！」

加賀は文字通り血相を変えて叫び、やはり陽次郎と春翔を、初めて見る険しい表情で見つめる。

それまでどんな性的な修羅場でも余裕の表情を崩さなかった加賀の豹変に、陽次郎と春翔は一気に緊張するが、次の瞬間、加賀は予想外の行動で二人を驚愕させる。

「すまん！申し訳ありませんでした！」

加賀は全裸のままザーメンの海に頭を突っ込んで土下座した。

「……つまり、オレは兄ちゃんに間違われて、春翔はその巻き添え？」

陽次郎の言葉に、加賀と兄の颯太郎は神妙な面持ちで頷く。

ザーメンの海から救出された後、陽次郎と春翔がシャワーを浴びて出てくると、なぜか陽次郎の兄の颯太郎が駆けつけていて、ようやく全ての事情が明らかになった。

元は任侠団体だった祖父の組を継いだ加賀が、社会からの落伍者の組員達を喰わせるために、自身も出演して少年AVや生SMショーを始めて成功して、今回も有料イベントを企画したのだが、イベントに『出演』する予定だった男子中学生二人が急病で出演できなくなり、急遽、その『代役』を颯太郎とその友人が務める事になった。

しかし、双方の連絡と確認が不十分だったため、『箭学園中等部空手部のサマーキャンプ』と『筋肉美少年二人組』そして『久我という名前』が一致した陽次郎と春翔が間違われたという事だった。

しかも実は、海水浴場での強制浣腸と脅迫による拉致場面からすでにイベントは始まっていて、その様子も観客に中継されていた。

それを陽次郎達が本気にしたため最後まで発覚しなかったのだ。



「…そう言われれば、あれっ？って瞬間もあつたよね…」

すっかり脱力した陽次郎の言葉に、春翔も渋い顔で頷く。

「そう言えば！キャンプは？」

陽次郎は慌てて時計を見る。気が付けばもう夜も遅い時間で、自分たちが突然いなくなつて騒ぎになっているはずだった。

「そっちは大丈夫だ。オレがすぐに気づいて上手くやつてある。ただ、その…、紹介者とすぐに連絡がとれなくて、結局間に合わなかった」

颯太郎は気まずそうに言う、さらに何かを言いかけて躊躇う。

「どうせ、ご主人様は仕事で、すぐ連絡取れなかったんだろ？」

陽次郎の言葉に、颯太郎は青くなり、すぐに首まで赤くなった。

「オレ、兄ちゃんがエロirikエストサイトで人気者で、しかもIT企業の社長が『ご主人様』なの知ってるぜ！今回の話も、その社長さん経由の話だったんだろ？」

「…どうしてソレをっ」

畳みかける陽次郎に、颯太郎は間抜けなセリフを言うのがやつとだ。

「オレらのクラスでも、颯ちゃんのファンが三人いるよ」

気の毒そうに春翔が言うと、颯太郎は頭を抱えて絶句する。

「だいたい、あれだけ派手にやっていて、それでも隠せてると思うほうがどうかしてるぜ？キュウタロウくん？」

裏サイトでの源氏名を弟に言われて、颯太郎はぐうの音も出ない。

しかし、すぐに開き直つて弟を問い詰める。

「…で、要求はなんだ？お前が、ただ泣いて被害者ぶるだけなワケはないからな！どうせなら今回の録画を売りさばく許可も含めて要求しろ。そうすれば、かなりの金額になるぞ？ですよね加賀さん？」

兄弟のアレな会話に苦笑していた加賀は、突然話を振られて驚きながらも、目を輝かせて深々と頭を下げる。

「もちろんだ！ぜひお願いしたい！諸々を許してくれるなら、俺に来ることはなんでもする！」

「…なんでもだね？」

陽次郎と春翔は、とても悪い顔で笑つた。

「なんで俺も？」

「往生際が悪いぜ颯太郎！『だいたいオレらのせい』だろ！」

サマーキャンプの翌日、加賀と颯太郎はSMキャンプのスタッフユニフォームでお揃いのTシャツと短パンを着用して、海水浴場にある海の家横に立っていた。

「じゃあ、始めるぜ！」

加賀は楽し気にさういうと、自分で短パンを下着ごと足元まで落として、ズル剥けしたデカイチンポを丸出しにし、Tシャツを捲りあげて形の良い大胸筋と六つに割れた腹筋を晒す。

「キュウタロウくんは勃起が約束だよ！」

弟の意地悪な一言で、颯太郎も腹を括つて短パンを下してズル剥けの勃起ペニスを晒し、Tシャツを捲つて乳首とへそを晒す。

「うん！いいね！筋肉兄貴二人のおちんちんチャレンジ！」

陽次郎は笑いながらスマホを二人に向ける。

昨晚、陽次郎と春翔が出した条件は、十分な報酬とは別に『ちよつとした悪戯』への協力だった。

「へへっ！これはバズるぞお！」

陽次郎はスマホを覗きながらも、視界の隅では海の家の前でこちらに向けて人を集め、警官を誘導している春翔を見てほくそ笑む。

その動きに気付いた颯太郎は動揺して慌てるが、加賀は気付きながらも平然とスマホのカメラに向かってVサインを出して笑う。

「なるほど、中一らしからぬ悪辣な手口だな！好きだぜさういうの！OK！せいぜい派手にフリチン逃走劇を見せてやるぜ！」

「そんなあつ！」

驚愕する颯太郎の悲鳴に被るように、春翔の大声が響く。

「おまわりさん！あいつらです！」

おわり

ちかんに注意!
竹鍋署





夏コミ御来場の皆様 暑い中お疲れサマ〜♪(定型)
イラスト担当の筍屋です
この度は この本をお手にとって頂き
誠に有難うございました m(_ _)m

イヤというほど聞かされ&言ってますが今年は暑いですねえ
昼間の仕事でグッタリで原稿とかマジ無理って感じで(〃；
という事で例年より薄い薄い本ではありますが
どれか一枚でも琴線に触れる絵がございましたら幸甚です！
(上手く行かない事は全部夏のせい)

筍屋 takenokoya@yahoo.co.jp
竹藪館 <http://www.hi-ho.ne.jp/su-oh/keikoku.htm>
(御意見 御感想ありましたら宜しくお願いします)
ツイッターもやってます 最新ア力はHPで御確認を！

はじめまして&おひさしぶりです。
へたれ文字書きのた〜んけーです m(_ _)m

今回は、初心に帰ってSMモノです。
まあ、いつもですが。気持ち的に。
そして今回は既刊作品の続編的要素もあります。
「三人で、ひと夏を」「撮れたてっ！生鬍り」
の2作品をご覧になると、ちょっと面白いかも。
まあ、結局は筋肉少年をいかに脱がせて鬍るかですよ！
どこか一場面でも、皆さんの琴線に触れられたら幸いです。

2018年8月 た〜んけー
turn_k_vf@yahoo.co.jp

超ハード！？SUMMERキャンプ

2018年8月11日 初版発行
発行/筍御飯VF
著者/筍屋&た〜んけー
印刷所/株式会社 プロス
連絡先/turn_k_vf@yahoo.co.jp



筍学園中等部空手部

1年生

久我 陽次郎



超ハード!?
Summer
キャンプ



超ハード!?
Summer
キャンプ



成人向
FOR ADULT ONLY